山内乾史編著（2015）『学修支援と高等教育の質保証Ⅰ』学文社

Book Review –Kenshi YAMANOUCHI (2015) *Learning Support and Quality Assurance of Higher Education*

大西好宣
ONISHI Yoshinobu

要旨　わが国の高等教育分野における新たな研究対象として、学修支援への関心が徐々に芽生えて来た。例えば、日本学術振興会が実施する科学研究費助成事業には、2013年に初めて学修支援がタイトルに含まれる研究課題が採択され、その後も年数件のレベルではあるものの、同様の研究が採択されるに至っている。本書評では、その嚆矢となった研究「学生の学力と学修支援に関する比較研究―日英瑞３カ国を中心に―」（研究代表者：山内乾史）の歴史的意義に着目し、その成果物である山内乾史編著（2015）『学修支援と高等教育の質保証Ⅰ』（学文社）を批判的に読み解く。総じて、オリジナルの調査データや科学的なエビデンスは少ないものの、中には国際的な評価にも耐え得るであろう、価値のある成果も見られた。

１、背景

わが国の高等教育学において、学修支援は比較的新しい研究分野である。試みに、日本最大の公的研究助成制度である日本学術振興会の科学研究費助成事業（科研費）データベースを見てみよう。研究課題名に学修支援の四文字が含まれている研究の開始年別採択数は表１のようになっている。

表１　学修支援に関する研究課題数

開始年	～2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	合計
件数	0	1	0	0	3	1	2	2	4	13

出典　科研費データベースより評者作成

この表からわかるように、学修支援に関する科研費への申請が最初に採択されたのは、2013年と比較的最近のことである。しかも、年間の採択件数はわずか数件で中にはゼロの年も複数ある。累積の採択数がようやく二桁となったのは2020年のことであり、少なくとも量的な意味において、学修支援に関する十分な研究がなされているとはお世辞にも言えない状況が続いている。

けれども、量の不足は質の高さで補うことが可能である。もし、これまでに採択された計13件の研究の質が十分に高ければ、そこにわずかな救いがあるというものであろう。そこで本稿では、2013年、課題名に学修支援を含む研究として科研費（基盤研究C）に最初に採択された事例（次章参照）の歴史的な意義に着目する。より具体的には、その２年後に当該研究の成果物として発行された本書（山内、2015）を取り上げ、学修支援分野の論

考に限ってその内容を紹介したい。

２、本書の概要と構成

本書はそのはしがきにもあるように、2013年に開始された科研費採択研究「学生の学力と学修支援に関する比較研究―日英瑞 3 カ国を中心に―」（研究代表者：山内乾史）の成果物第一弾である。そこでは二重の意味で、異質な二つの事柄が扱われている。

まず本書の前半は、高等学校、短期大学、（４年制）大学それぞれの学修支援に関する問題を扱い、後半は一転して（課題名にはない）高等教育の質保証という別の問題を扱っている。それが二重に異質と指摘した、第一の意味である。なお、本書評では学修支援に焦点を当てるという意味合いから、第 1 章から第 5 章までを扱い、残りの第 6 章及び第 7 章で触れられている高等教育の質保証に関する論考については分析を割愛したい。

本題に戻ろう。二番目に異質なのは、前半の学修支援については国内の視点が中心となっているのに比べ、後半の質保証に関してはいずれも海外の事例が紹介されていることである。なぜこうした構成になっているのか、本書の中には残念ながら何ら説明がないため、その詳細は不明である。

本書は以下のような七つの章による構成となっている。分析をしないと断った第 6 章及び第 7 章についても、参考として見出しを掲げておく。

第1章　私的経験に基づくアクティブラーニング論

１　問題の背景／　２　「教育」から「学修支援」へ／　３　４つの原則／　４　アクティブラーニングの多様性／　５　私の失敗例（その１）―P大学におけるグループワーク／　６　授業時間外の学修をどうモニターするか／　７　さらなる私の失敗例（その２）／　８　ひとまずの結論

第2章　21世紀型の学力を目指した学修支援―高等学校の学力階層と生徒指導上の課題に着目して―

１　学習指導要領の変遷と「学力」観／　２　「学力」論はどのように変化したのか　３　これからの時代に求められる「力」とは何か／　４　「つながれない」高校生の現実／　５　問題行動と高校の学力階層との関係―生徒指導上の諸課題の特質―／　６　社会関係資本の重要性／　７　子どもや若者に必要な「つながる」力とは何か

第3章　学修支援の視点に立った保育者養成校の授業構築―協同学習と絵本を活用した論理的思考力の育成に着目して―

１　保育者養成校におけるディプロマ・ポリシー／　２　カリキュラムにおける「言語表現」の位置づけ／　３　絵本を活用した論理的な思考力の獲得／　４　効果的な学習を促進するための工夫―協同学習の視点―／　５　学習支援の効果―学生の学習成果に基づく評価／　６　まとめ―学習を通しての学生の変化―

第4章　留学生の学修支援

１　オン・キャンパスの学修支援／　２　オフ・キャンパスの学修支援

第5章　大学生の留学送り出し支援におけるプロセス評価―ラーニング・ポートフォリオ活用の可能性―

1　本章の目的と背景／　2　ラーニング・ポートフォリオの概要／　3　ラーニング・ポートフォリオに関する先行研究／　4　留学支援におけるラーニング・ポートフォリオの利用状況／　5　留学支援における特有の課題とラーニング・ポートフォリオ活用の可能性／　6　今後のラーニング・ポートフォリオ活用の可能性

第6章　スウェーデンにおける教員養成課程の質保証に関する考察

1　スウェーデンにおける教員養成教育の歴史／　2　教員養成課程の質保証／　3　教員養成課程に関する内部質保証の進め方―リンネ大学の場合―

第7章　中国の大学評価制度の変遷とその課題

1　大学評価制度の発足／　2　大学評価制度の実践／　3　合格評価の変遷／　4　審査評価

3、本書を読み解く

本書は編者である山内以下、担当順に原、高橋、塩川、杉野、武、邵といった計７人の著者によって執筆されている。複数の著者による分担著であるという利点を生かし、例えば同じ学修支援というトピックでも、高等学校、保育系短大、さらには留学（生）支援など、実に多彩な視点が紹介されていて興味深い。以下、順を追って見て行こう。

(1)「第1章　私的経験に基づくアクティブラーニング論」について

本章にあるのは、山内個人が体験した多くの逸話（エピソード）である。どれも事実（ファクト）なのだろうが、その視点は主観的であり、科学的・学術的な意味での論拠（エビデンス）やデータではない。同じ大学教員としてその内容に共感はするものの、その感覚はあくまで身辺雑記風エッセイとしての面白さである。学術上の客観的な研究成果を期待した多くの読者はおそらく戸惑うであろう。

さらに山内は第一章の最初の頁で次のように言う。

「学習」と書くのか、「学修」と書くのか、これはいろいろ議論のあるところだが、私は基本的に可能な限りlearningは「学習」、その他は「学修」で通すことにする。

（出典　本書p. 1.）

しかし、それにしては本書の日本語タイトルは「学修」、その訳である英語タイトルには“learning”が用いられており、前記の宣言と矛盾する。因みに、学習と学修の違いについては、清水（2015）及び谷川（2017）に詳しく、それを引用した拙稿（大西、2020a）でも触れたので参照されたい。

また、評者にはこの章の主たる題材であるアクティブラーニングと、研究課題である学修支援との関係が必ずしも判然としなかった。そうした説明が一切ないからであろう。

(2)「第2章　21世紀型の学力を目指した学修支援―高等学校の学力階層と生徒指導上の課題に着目して―」について

本書のはしがきで「研究成果」と編者自ら紹介した割に、オリジナルのデータやエビデンスが皆無であった第 1 章に比べ、第 2 章には見るべき成果がある。高校生のネットいじめに関して調査した表 2 - 3 （p. 50）がそれである。

同表では、学力別に見た高校生のネットいじめの現状が示されている。上位校のいじめが学校裏サイトへの投稿及び画像流出が多いのに比べ、多様校ではブログでの誹謗中傷が多い。要は、成績が中位以下の高校生たちの間では、ある意味わかりやすい直接的ないじめが横行するのに対して、成績上位の高校生によるいじめはより陰湿であるという示唆であろう。もちろん、直観では十分理解出来る事柄ではあるものの、それをデータで端的に示した功績は決して小さくない。

本章はわずか16頁という分量ではあるものの、他にも学力観の変遷や、将来必要な学力とはどのようなものかについて冷静に振り返りつつ考察している。この点で本章はコンパクトに良くまとまっており、高校教育に携わる関係者ばかりではなく、我々大学人にも教育観や現代の若者を知る上で多くの示唆が得られる構成となっている。

(3)「第3章　学修支援の視点に立った保育者養成校の授業構築―協同学習と絵本を活用した論理的思考力の育成に着目して―」について

この章については、評者には第 1 章と同じく正直その価値がよくわからない。内容は章のタイトルにあるように、保育士を目指す短大生に絵本を活用したグループ学習を導入したというユニークな試みを紹介したもので、研究成果というよりはむしろ教育上の実践報告であろう。

ただ、学生が目を大きく見開いて「そうか！」と叫んだからと言って (p. 76.)、当該メソッドに効果があったと断じるのは些か早計であろう。著者（高橋）自身が述べているように、「当然ながら客観的とはいえない」からである。ここで必要なのはより客観的なエビデンスであろう。

それにしても、第 1 章のアクティブラーニングといい、本章の絵本を活用した協同学習といい、学修支援というよりは教育方法論に近い問題ではないのだろうか。読んでいる方はそれらの関連性がわからず、徒に混乱が深まる。

(4)「第4章　留学生の学修支援」について

第 4 章の主人公は、わが国の大学で学ぶ外国人留学生と彼らを支援する人々である。内容はかなり学修支援という要素を多く含むものとなっており、前章までを読んで感じた混乱や疑問はある程度氷解するだろう。書かれている内容はいずれも現実に即した実践的なものであり、この点、事務職員として、また教員としてもこの分野で活躍した著者（塩川）の面目躍如というところであろう。

但し、第 1 章及び第 3 章と同じく、研究成果と言えるだけのオリジナルなデータやエビデンスは章を通じて皆無である。文部科学省による補助事業の廃止（p. 102.）など、関連する事実の紹介はわずかにあるものの、この章の記述内容はさしずめ外国人留学生支援のためのガイドブックとでも呼ぶべきものであろう。酷な言い方をすれば、多くの大学が既

に実践しているであろう経験知を文章化して整理し、ただ羅列したに過ぎない。

(5)「第5章　大学生の留学送り出し支援におけるプロセス評価―ラーニング・ポートフォリオ活用の可能性―」について

第 4 章と同じく留学というテーマを扱っているものの、前者がinboundの外国人留学生に焦点を当てたのに対し、第 5 章ではoutbound、つまり主として日本人の海外留学希望者を扱っている。そして、本章こそが本書の白眉であろう。

本章では学生の海外派遣時に、ラーニング・ポートフォリオをどのように活用するか、或いは活用出来るかについて、調査の方法論に加え、オリジナルのデータが紹介される。この分野の先達である芦沢（2012）による研究成果などもきちんと引用されており、それらの点で当該研究に対する安心感と信頼性が感じられる。

実は、アメリカにおける学修支援専門職の職能団体National Academic Advising Association（NACADA）でも、留学支援は学修支援の一分野として重視されている（大西、2018 & 2020b & 2020c)。その意味で、五つの大学や企業に対するインタビューやアンケート調査によって、留学支援におけるラーニング・ポートフォリオの有用性が確認されたことは日本からの知的貢献となり得る。是非とも当該研究成果を英語で発信して欲しい。

ただ一方で、残念ながら細かい瑕疵も目に付く。例えば、次の文章（p. 121.冒頭）の主語は何であろうか。

まず、ラーニング・ポートフォリオの先進国ともいえるアメリカでは、従来のものとは異なる新しい評価方法の開発に端を発している。

加えて、学生と生徒という用語が両方同じ意味で用いられていることによる混乱も見られる（p. 137.)。将来、改訂版が出版されるようであれば、是非修正して欲しい。

４、まとめ

結局のところ、学修支援分野の見るべき研究成果という意味では、本書第 2 章及び第 5 章にそれが示されていると評者は結論する。特に第 5 章で示された研究成果は、NACADAなどの場で国際的な評価を得られるかもしれない、潜在的な可能性を秘めている。

他方、残りの章は有益な参考情報としての肯定的な価値は認めつつも、客観的な評価の難しい実践報告（第 1 章及び第 3 章）や既に知られている事実を整理したもの（第 4 章）に過ぎず、研究成果と呼ぶにはいずれも何かが足りないのではないか、というのが本書に対する偽らざる印象である。

ただ、そうした一方的な評価のみをもってこの研究（前記「学生の学力と学修支援に関する比較研究―日英瑞 3 カ国を中心に―」）全体の価値を最終的に判断することは出来ない。その第一の理由は、本書評があくまで一個人によってなされた主観的な評価に過ぎないこと、そして第二に、後半部分の高等教育の質保証に関する論考について一切分析も評価もしていないことである。

そして、さらに重要な第三の理由がある。それは、本書があくまで研究成果の第一弾であり、言うなれば一種の途中経過に過ぎないことである。本書と併せ、最終報告的な意味

合いのある第二弾・山内乾史＆武寛子編著（2016）『学修支援と高等教育の質保証Ⅱ』（学文社）が控えている。歴史的な価値を有する当該研究の全容に少しでも近づくため、いずれ後者に関する書評も実現したいと願う。

引用及び参考文献（アイウエオ順）

芦沢真五（2012）「海外学習体験の質的評価の将来像」『留学交流』Vol. 20., pp. 1-7., 日本学生支援機構
大西好宣（2016）「書評：アカデミック・アドバイジング　その専門性と実践　日本の大学へのアメリカの示唆」『人文社会科学研究』第33号、pp. 120-123., 千葉大学
大西好宣（2018）「アカデミック・アドバイジング（学修支援）の現在と未来：米国NACADA 2018年次大会に参加して」『大学マネジメント』Vol. 14. No. 8, pp. 37-45., 大学マネジメント研究会
大西好宣（2020a）「書評：アメリカの大学に学ぶ学習支援の手引き」『人文社会科学研究』第40号、pp. 227-231., 千葉大学
大西好宣（2020b）「米大学における学修支援専門職の関心領域及び役割：日本への教訓」『JAILA JOURNAL』第6号、pp. 58-70., 日本国際教養学会
大西好宣（2020c）『海外留学支援論　グローバル人材を育てるために』東信堂
清水栄子（2015）『アカデミック・アドバイジング　その専門性と実践　日本の大学へのアメリカの示唆』東信堂
谷川裕稔編（2017）『アメリカの大学に学ぶ学習支援の手引き』ナカニシヤ出版